

私は昔からトールキン作品が好きで、何回も読み込みました。そのうち、トールキン作品中に出てくる“食べ物”について注目しました。理由は作品中の食べ物は食べている人物の背景、そのシーンの状況や雰囲気などを提示し、その後の展開を暗に示唆するものではないかと思ったからです。また、トールキン作品中にはトールキン自身が創造した食べ物もあり、重要な役割を担っています。よって私はトールキン作品の“食べ物”について研究したいと思いました。

私は、数あるトールキン作品の中から「ホビットの冒険」を選びそれについて研究することにしました。作品中に出てくる食べ物を全て調べ一つ一つの食べ物が担う役割を考察しました。“食べ物”といっても意味は広義に捉えて飲み物や料理も一つの“食べ物”として数えます。

考察するにあたって、どうしても「ホビットの冒険」の内容を詳しく知っていないと理解しづらい部分がありますが、内容を簡単に紹介します。

この話は内気で引っ込み思案なホビットという種族のビルボという中年くらいの主人公が突如訪れた魔法使いとドワーフ十三人に半ば強引に連れ出され中つ国のあちこちを探検し失われたドワーフたちの宝物を取り戻すお話です。

この物語に出てくる食べ物は近代的なものは一切なく、トールキン自身が中世英文学を学んでいたことから食生活のモデルは産業革命以前のイギリスの食生活であると考えられます。大抵の場合主な主食はパン、主菜は肉の場合が多いです。パンは炭水化物、肉は蛋白質であり、生きるために欠かせないものです。飲み物は時に応じて変わりますが水、ワイン、ビールなどが一般的です。

調べた作品中では沢山の種族が出てきます。作品中では種族ごとに善（味方）と悪（敵）の二種類に分けられます。登場人物ごとに個人差はありますが味方はホビット族、エルフ族、ドワーフ族、人間、熊人族などがいて敵はゴブリン族、トロール族などがいます。また、種族によって多少の食文化の違いがあります

出てくる食べ物の基準は

- 一、名称がついているもの
- 二、実際食べていないものも含む
ということにしました。

上下二巻合わせて約三十余りの食べ物が出てきます。その中で作品内の役割がほぼ同じものは同時進行で紹介していきます。

これらを踏まえて見ていきましょう。

ホビットの冒険上巻に出てくる食べ物

- 一、 コーヒー・ビール・黒ビール・バター付きホットケーキ・
種入りの焼き菓子・赤葡萄酒・いちごジャムとリンゴの
パイ・干しブドウ入りのパイとチーズ・ポークパイとサ
ラダ・卵（二十七頁〜三十一頁）

この食べ物が出てくるシーンは十三人のドワーフと魔法使いガンドルフがビルボの家に押しかけてくるシーンです。ホビットの本中ではかなりの御馳走の部類に入ります。

これらはドワーフ達がビルボに一気に食べ物を頼む際注文したものですがこの量からしてドワーフ達は“大食らい”であることが分かります。そしてビルボはこの注文を受けた際「うちの食物蔵の中身を自分よりもよく知っている！」と驚きました。普通こんな頼まれたら一つぐらい準備していないものだってあるだろうに：と思います、これらがきちんと食卓に並べられたことからドワーフ達は何か不思議な力でも持っているのか？と思わずにはいられませ

ん。また、ドワーフ達の中でもトリーリンというドワーフの長だけは赤葡萄酒を頼み、ほかのドワーフはビールなどを頼んでいることからトリーリンは一人だけ別格であるようにも思えます。

平和で穏やかだったビルボの生活を、十三人のドワーフ達とガンダルフの一行がやって来て非日常が始まるであろうということを暗に示しているのではないかと思います。

二、 ハムと卵六つ（六十一頁）

この食べ物が出てくるシーンは、ドワーフ達が会議を終え寝る前にトリーリンがビルボに注文した朝ごはんです。正確には「ハムに卵を六つ落とす。ただし丸ごと。」という具合です。結局ビルボは実行しませんでしたが、前後の会話から見るとドワーフは相手の都合構わず注文していく自分勝手な種族であることが分かります。

ビルボは来客に振り回されて何やら変な冒険に足を突っ込まされそうになり疲れていたことから「絶対に朝ご飯の準備なぞするものか」と決めてしまいました。ビルボが少々頑固であることが分かったシーンです。

三、 羊の炙り肉（七十六頁〜七十七頁）

ここで初めて主人公にとって敵となる存在が登場します。この羊肉を食べていたのは、三人のトルルでした。炙り肉といってもきちんと味付けなどをした訳ではなく、人間を食べたかったがもう食べつくして一人もいないので仕方なく羊を食べていました。このシーンの描写から見るにトルルたちは羊を適当な炙り方であぶっていました。このことからしてトルルは粗野で乱暴な性格であることが分かります。

仕方なく羊を食べていたところに現れたのはドワーフ一三人とホビット。ドワーフ達は太っているので美味しそうに見えたことでした。

よう。最終的にはガンダルフとの機転のおかげで、トルルたちは倒されその上良い武器などを見つけれられたのでめでたしといえるでしょう。

四、チーズ・パン・ベーコン（九十二頁）

これらはトルル戦で手に入れた食料のうち、次の日の朝食食べたものです。英国の食事（特に朝ごはん）にはよく厚切りのベーコンが乗っています。これは英国の朝ごはんをイメージしたものだといえます。忌々しいトルルたちから解放された喜びに浸りながら食べた朝ごはんはさぞかし美味しかったことでしょう。

このトルキンの物語ではよく戦いの後にこうしてごはんを食べることが多いです。食事は読者を安心させ、一休みさせる役割を担っているとも言えます。

五、野いちご・黒イチゴ（一九四頁）

野いちごはビルボがゴブリンたちに一行が追われている最中、あまりにもお腹がすいて口にしましたものです。“たいして美味しくない”と言われていて、同ページには「黒イチゴがやっと花をつけ始めた」とありますからきつと三〜四月頃であったと思われる。

六、ベーコン（二一七頁）

これは実際食べたものではありません。ゴブリンたちから逃げようとして木に登ったはいいものの、登った木をゴブリンたちが火にかけ、あわや大惨事というところで驚たちに助けられたシーンをビルボが例えたものです。

次々に起こる事件に対してビルボの頭がこんがらがりに「ベーコンがフライパンの中からフォークに持ち上げられて、棚の上に戻された気持ちが良い分かる！」と口走ります。ベーコン＝ビルボたち、

フライパンに火にかけられ燃えている現場、フォークに驚、棚に驚たちの住みか、崖の上に連れていかれたから。このとんちんかんな発想にドーリというドワーフが冷静なつつこみを入れています。『ベーコン』に自分を例えたのは、自分が焼かれたらベーコンになるということと家に帰ってベーコンを食べたいという願望が混ざったからだと思います。

七、ウサギ肉・羊肉（二二二頁～二二二頁）

ウサギや羊はトールキン作品内ではよく扱われていて、特にウサギは旅中の食事としてはメジャーに近い存在です。どちらも捕まえるのが容易いからでしょう。この時、ビルボは“本当はパンのほうがいいので、余程家に帰りたいのでしよう。この先何度もビルボは何度も家に帰りたいと言っています。”

四と同じように、この食事はゴブリンたちから逃れてきた際食べたものなので読者に一息つけさせる為用意したものだと思います。

八、蜂蜜酒・バター・蜂蜜・クリームとパン（二五五頁～二五六頁）

これらはビルボたちがエルロンドの館を離れて以来の豪華な食事であり、お邪魔させてもらった熊人族のビョルンというひとの作った食事です。ビョルンは中つ国に生息していた熊人族の最後の生き残りで熊に変身し、蜂蜜を主食としています。

なぜ蜂蜜なのか：私は熊のプーさんと関連性があると思います。プーさんの作者A・A・ミルンはイギリスの児童作家でありトールキンもこの作品を子供たちの為に描いています。熊に蜂蜜は従来の熊の恐ろしさを緩和させ、味方・善人にイメージを変えさせたのだと思います。

九、 木の実と草の実・干し果物・コムギ粉・二度焼きの菓子・
蜂蜜

一行が出発する際ビョルンがくれた食料です。ビョルンが作るものはどれも蜂蜜が入っており、作り方は独自のものです。

トールキン曰く干したもので焼いた菓子は長持ちし、蜂蜜は体に良いから入っているということです。しかし、ビョルンがこの時忠告したことをドワーフ達は破ってしまいます。

少々行先が不安になる場面です。

十、 パン・肉・水（三三十頁）

これらはトールリンがエルフ王に捕まり牢屋に入れられた時もらった必要最低限の食事です。トールリンとエルフ王には因縁があり、かつてトールリンが危ない目に遭ったのにも関わらずエルフ王が助けなかったことから仲たがい状態が続いています。

この食事はエルフ王が示したトールリンに対しての冷遇ぶりを示しているといえるでしょう。

ホビットの冒険下巻に出てくる食べ物

一一、 強い葡萄酒（二二頁～二四頁）

これはお酒に強いエルフ王までも眠らせてしまう、エルフ王のための葡萄酒。ちゃんと産地が明記されており“ドルヴィニオン”というブドウ畑から採れたブドウを使用しているそうです。ちなみにワインの品名表記をしているトールキン作品はもう一つあり“指輪物語”です。指輪物語に出てくるワインはホビットが作ったワインであり“南四が一床産のオールド・ヴィンヤード”というものです。

このエルフ王の葡萄酒が大きなキーポイントでこれをこつそり

飲んだ見張り番のエルフたちが皆眠ってしまったおかげで、ビルボたちはここを抜け出すことができました。物語が進む上での重要なアイテムといえるでしょう。

一二、たらふく（一五十頁、一九二頁）

“たらふく”はトールキンが創作した食べ物です。たらふくは湖のほとりに住む人々が作ったもので“ビスケットのようだがそんなに美味しくはないもの”であり非常食糧です。また、持ちがよいことから旅の際にはよく使われる食べ物、なのだそうです。

ビルボたちが湖の町を出発する時住んでいる人たちから貰ったもので恐ろしい竜の住みかから逃げ出してきた後朝ごはんとして摂ったものでした。たらふくは英語で“クラム”といいます。クラムは英語で満腹、いっぱいなどという意味があります。

瀬田貞二さんの翻訳では“たらふく”と訳されていましたが、指輪物語では“クラム”と訳されてしまいました。瀬田貞二さんの的確でユーモアのある訳し方は改めてすごいなと思いました。

一三、ベーコン卵のごはん（二〇六頁）

最後の合戦前、ビルボが思い出していたごはんです。ビルボはこの冒険で勇気や知恵を身につけたものの、やはり家に帰りたいたいという思いが感じられます。

四でも述べた通り、イギリスの朝ごはんにはよくベーコンが乗っています。ベーコンは冒険に出たら普通は食べられないもの、ましてや家で作るものなど味わえません。ビルボはそれを懐かしく想っていたのでしょう。

結論

ここまで考察をして、食べ物から登場人物の性格がわかったり他の作家の作品との共通点が見つかったり、物語を進める為に重要な食べ物があったりと色々な発見をすることができました。

主旨から少々ずれてしまった部分もありましたが一番はこの本の面白さが読んだ人に伝わってくれることです。トールキン作品の一番の魅力はただの平面的な“お話”ではなく描写が実にリアルで立体的であることです。このかつてない本物のような冒険物語はのちにRPGというゲームを生み出したことでも知られています。

いくら物語の主人公であろうと、お腹が空くときは空く、美味しそうな匂いがしたら食べ物を食べたくなる。魔法使いのガンダルフであろうとそれは変わりません。事件があった後は休みたいし辛くなったら家に帰りたくなる。そういう人間的な面を持ち合わせた登場人物たちによってこの物語は彩られていくのだと思います。

参考文献

ホビットの冒険上下 J・R・Rトールキン作 瀬田貞二訳 岩

波文庫

小学館の図鑑NEO②植物 小学館

指輪物語2 旅の仲間上下 J・R・Rトールキン作 田中明子・

瀬田貞二訳 評論社

英国フード記Atoz 石井理恵子著 三修社

図説イギリスの生活誌 道具と暮らし ジョン・セイモア著 小

泉和子監訳 生活史研究所翻訳 原書房

ロード・オブ・ザ・リング&ホビット中つ国サーガ読本 旅の仲

間+別冊映画秘宝編集部..編 洋泉社